四半世紀を積み上げた緑化協力

認定ＮＰＯ法人緑の地球ネットワーク

緑の地球ネットワークが山西省大同市で緑化協力を開始してから四半世紀になります。最初は規模も小さく、失敗も多かったのですが、日中民間緑化協力委員会資金の支援も受け、だんだんと発展させることができました。25 年間に植えた苗木は 1887 万本、面積は 5922ha になり、それぞれに特色をもった緑化拠点を 3 か所建設しました。

この間に現地を訪れた専門家とボランティアは延べ 3730 名になり、なかには 20 年かけて 21 回も通ったリピーターもいます。いくつもの企業の労働組合や CSR の支援もえました。ここまでつづけることができたのは、現地カウンターパートと強固な信頼関係を築き、着実に成果を積み重ねてきたたまものです。

2016 年 8 月 31 日には、この協力事業に直接間接にかかわった中国の友人たちによって、記念の集いが北京で開催され、中国人と日本人あわせて 130 余名が出席しました。中国側では副部長（副大臣）クラスの幹部 4 人が出席し、日本側からは日本大使館の公使はじめ、在北京の各団体の代表が出席しました。席上、主催者の中日友好協会から高見邦雄副代表に「中日友好使者」の称号が授与されました。人民日報、新華社をはじめ中国の多数のメディアがそのもようを報道しています。

「時は金なり」といいます。でも、お金で時間を買うことはできません。それができたら緑化はラクですが、森林を再生させるには、種から苗を育ててそれを植え、育つのを待つしかありません。

大同県の采涼山プロジェクトは日中民間緑化協力委員会資金と同じ年にスタートし、6 年をかけて 230ha を植えました。林業局の技術者は口をそろえて「自然条件が悪いし、周囲の農村も貧しすぎる。成功の見込みがないから、ここは避けた方がいい」とアドバイスしてくれました。

黄土高原では条件の悪いところが圧倒的に多いのです。それを避けていたら緑化はできません。日本の専門家が菌根菌を活用した育苗技術を持ち込み、地元の古参技術者は草の根の優れた整地方法を結びつけました。15 年後の今日、そのとき植えたモンゴリマツ（樟子松）は樹高 6m 以上に育ち、立派な林になっています。

采涼山プロジェクトのマツは樹高 6m まで育ってきている。

私たちのプロジェクトが成功しただけではありません。大同は北京・天津の水源であり、風砂の吹き

出し口です。2002 年からは北京天津風砂源治理工程の国家プロジェクトがはじまり、その重要会議が大同で開催されたとき、私たちのプロジェクトは現場見学会の会場になりました。やがてその隣接地に 1000ha 規模の国家プロジェクトが配置されたのです。そのような例はほかにいくつもあります。呼び水の作用を立派にはたしたと言えるでしょう。

大同では近年、新たな植林地をみつけるのに苦労するようになりました。東隣りの河北省張家口市蔚県に新たなプロジェクトを開拓しているところです。地貌も気象条件もよく似ていますので、これまでの経験と技術をそのまま活かすことができます。